

Study Abroad Annual Report 2014

お茶の水女子大学グローバル教育センター

海外交換留学派遣生 留学報告書

2014



交換留学派遣生 留学報告書の発刊にあたって

お茶の水女子大学は、世界各国の大学と交流協定をもち、これらの協定大学に、毎年意欲ある優秀な学生を派遣しています。お茶の水女子大学グローバル教育センターは、学生の長期・短期の留学支援、海外からの本学に留学する学生の支援、海外の大学との協定締結といった業務を中心に、一貫して、お茶大のグローバル化促進の業務を担ってきました。

中でも、協定大学への交換留学派遣プログラムは、半年または1年という長期にわたり留学ができること、本学に在籍する学生であれば、本学が協定をもつ世界有数の協定大学に授業料免除で長期の留学が可能になり、語学のみならず着実な勉学の成果が得られること、実際に海外での長期滞在を経験して、さまざまな経験ができることなどが魅力として挙げられます。先日も、数年前に交換留学派遣を経験したある卒業生から、留学が「広い世界を見て自分を振り返る素晴らしい機会」であったと聞きました。海外での新鮮な体験から多くのことを学ぶチャンスとしてもっともっと多くの学生にこの制度を活用して、長期留学を実現してほしいと願っています。1人でも多くのお茶大生を交換留学で派遣するためには、多くの協定大学が必要となりますが、グローバル教育センターでは、新たに協定を締結して相互に交流をはかる協定大学を増やすことにもエネルギーを注いでいます。2015年10月時点の協定大学総数は66大学で、この規模の大学としてはとても多い数であるといえます。

2014年度の交換留学派遣プログラムでは、合計35名が海外の22大学に派遣されました。大学在学中に留学をする学生は、早い時期から綿密な計画を練ることが必要とされます。たとえば、実質的にお茶大を1年間離れることで、事前にどのような利点や知っておくべきリスクがあるのか等を調べ、帰国しお茶大に復学した後のことも計画しなくてはなりません。また、学内の審査に向けて、自分の研究計画をしっかりとみつめ、どのような勉強をしたいか、何に興味があるのかを精査することも重要です。派遣が決定したら、大学とのやりとりをはじめ、現地の様子を具体的に把握して渡航の準備をすることになります。それぞれの段階は決して楽でも簡単でもありませんが、グローバル教育センターに留学相談に訪れる学生が、留学の準備をする過程で自分のやりたいことを真摯にみつめ、みるみるうちに成長してゆくことが手にとるようにわかります。そして1年後、さまざまな経験をして帰国し、さらに成長した姿を見せてくれるのはほんとうにうれしいことです。

本報告からは、2014年度交換留学派遣プログラムで派遣された学生がたいへん充実した留学生活を送り、一段と成長して帰国したことがわかります。2014度から4学期制も導入され、6月から9月の夏の期間を海外で過ごすことが以前よりずっと容易になりました。お茶大生のみなさんには、在学中にぜひ1度は海外で留学および異文化体験を経験して、いっそうグローバルな視野をもてる人に成長してほしいと願っています。

グローバル教育センター長

戸谷 陽子

CONTENTS 交換留学派遣生 留学報告書 2014

WHO?

2014 年度交換留学派遣生

WHEN?

交換留学プロセス

WHERE?

留学先・協定校・提携校一覧

HOW?

留學生活の過ごし方、楽しみ方：2014 年度帰国後アンケートより

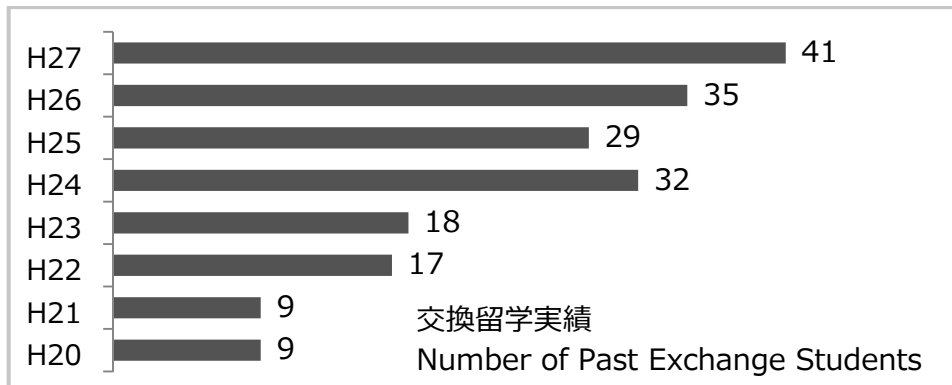
WHAT?

2014 年度交換留学派遣生 留学報告書

池田佳菜子
伊藤智恵
岩井綾香
江原 望
大内有紗
岡南愛梨
川上智子
河澄紗羅
神門ちあき
倉又瑞希
小林美晶
齋藤美咲
須崎情恵

高木優希
田島瑞保
多田佳乃子
谷田淑子
床枝さやか
生津千里
三浦夏乃
三浦 琴
柳下明莉
矢野智子
山本菜月
横川和花

2014 年度 大学間交流協定に基づく派遣学生



2014 年度交換留学派遣生

| | | |
|----------------------------|--------|--------------------|
| 北京大学歴史学系（中国） | 谷田 淑子 | 通年（H26. 8-H27. 8） |
| 復旦大学歴史学系（中国） | 大内 有紗 | 通年（H26. 9-H27. 8） |
| 梨花女子大学校（韓国） | 神田 慶子 | 半期（H26. 3-H26. 6） |
| | 須崎 情恵 | 半期（H26. 9-H26. 12） |
| | 田島 瑞保 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| 国立政治大学（台湾） | 須崎 情恵 | 半期（H27. 3-H27. 8） |
| ヴァッサー大学（アメリカ） | 安藤 有紀 | 通年（H26. 9-H27. 5） |
| | 神門 ちあき | 通年（H26. 9-H27. 5） |
| 南オレゴン大学（アメリカ） | 三浦 夏乃 | 通年（H26. 9-H27. 8） |
| | 川名 紗貴 | 半期（H26. 9-H26. 12） |
| モナシュ大学（オーストラリア） | 伊勢 茜 | 通年（H26. 7-H27. 7） |
| ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア） | 横川 和花 | 通年（H27. 3-H27. 11） |
| | 吉田 真央 | 半期（H27. 3-H27. 6） |
| | 後藤 あい | 通年（H26. 7-H27. 6） |
| | 高木 優希 | 通年（H26. 7-H27. 6） |
| | 片山 珠 | 通年（H27. 3-H27. 11） |
| | 野村 佳織 | 半期（H26. 7-H26. 11） |
| | 立花 久未子 | 通年（H27. 3-H27. 11） |
| オタゴ大学（ニュージーランド） | 岡南 愛梨 | 通年（H26. 7-H27. 6） |
| | 池田 佳菜子 | 半期（H26. 7-H26. 11） |
| マンチェスター大学（イギリス） | 川上 智子 | 半期（H26. 9-H26. 12） |
| | 齋藤 美咲 | 半期（H26. 9-H26. 12） |
| ロンドン大学 東洋・アフリカ研究学院（イギリス） | 生津 千里 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| | 柳下 明莉 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| ストラスブール大学（フランス） | 床枝 さやか | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| | 柳澤 明子 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| ブレーズ・パスカル（クレルモン第2）大学（フランス） | 三浦 琴 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| | 矢野 智子 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| タンペレ大学（フィンランド） | 河澄 紗羅 | 通年（H26. 9-H27. 5） |
| セントリア先端科学大学（フィンランド） | 多田 佳乃子 | 通年（H26. 9-H27. 5） |
| リンショープン大学（スウェーデン） | 小林 美晶 | 通年（H26. 8-H27. 6） |
| ワルシャワ大学（ポーランド） | 伊藤 智恵 | 半期（H26. 7-H26. 11） |
| ケルン大学（ドイツ） | 神田 慶子 | 半期（H26. 10-H27. 2） |
| | 山本 菜月 | 通年（H26. 10-H27. 7） |
| ブッパタール大学（ドイツ） | 岩井 綾香 | 半期（H26. 10-H27. 2） |
| ウィーン工科大学（オーストリア） | 江原 望 | 通年（H26. 9-H27. 6） |
| カレル大学（チェコ） | 倉又 瑞希 | 通年（H26. 9-H27. 8） |

交換留学プロセス

留学
準備



4 月

留学説明会

5～9 月

情報集め・語学力アップ

10 月

**留学説明会
募集開始**

10 月末頃

応募締切

11 月～

学内選考

2～4 月

学内内定/協定校申請

5～6 月

事前研修

「異文化適応」や「危機管理」についての指導（渡航前 4～5 回実施）

留学
開始

8 月

アジア・米国・欧州出発

◆オセアニアは翌年 1～2 月出発

帰国

10 月

**帰国報告会/
留学経験者相談コーナー**

◆派遣留学生在それぞれの留学先のエリアを中心に、留学に関する疑問や悩みの質問に答えます。

留学先・協定校・提携校一覧

お茶の水女子大学は世界各地に留学ネットワークを拡げており、交換留学を行う協定校は23か国61大学（2014年10月1日現在）に上ります。留学をめざす学生は、入学後早い時期から語学力を磨き、計画的に単位を履修するようにします。

Asia

① インドネシア
インドネシア芸術大学デンパサール校

② 韓国
韓国芸術総合学校舞踊院
慶北大学校
啓明大学校
建国大学校
淑明女子大学校
同徳女子大学校
釜山大学校
梨花女子大学校
高麗大学校

③ タイ
アジア工科大学院大学
タマサート大学
チェンマイ大学
プリンス・オブ・ソンクラーク大学

④ 台湾
開南大学
国立政治大学
国立台北芸術大学
国立台湾大学

⑤ 中国
大連外国語大学
北京外国語大学
北京大学歴史学系
復旦大学歴史学系

⑥ ベトナム
国立ハノイ教育大学
ハノイ大学
ベトナム科学技術アカデミー・ゲノム機関

Middle East

⑦ トルコ
アンカラ大学

Africa

⑧ エジプト
カイロ大学
マンソウラ大学

Oceania

⑨ オーストラリア
ニューサウスウェルズ大学
モナシュ大学

⑩ ニュージーランド
オタゴ大学

North America

⑪ アメリカ
ヴァッサー大学
カリフォルニア大学サンディエゴ校
カリフォルニア大学デービス校
カリフォルニア大学リバーサイド校
カルフォルニア州立大学プラトン校
チャタム大学
バーデュー大学
南オレゴン大学
オルブライト大学

⑫ カナダ
マギル大学



Europe

⑬ イギリス
オックスフォード大学クイーンズコレッジ
マンチェスター大学
ハル大学
ロンドン大学キングスカレッジ
ロンドン大学 東洋・アフリカ研究学院

⑭ イタリア
国立ナポリ大学オリエンターレ
コッレージョ・ヌオーヴォ
'サビエンツァ'ローマ大学
先端研究国際大学院大学 (SISSA)

⑮ オーストリア
ウィーン工科大学

⑯ スウェーデン
リンショーピング大学

⑰ スロバキア
スロバキア工科大学

⑱ チェコ
カレル大学

⑲ ドイツ
ケルン大学
パーギシェ・ブッパタル大学
ブレーメン応用科学大学

⑳ フィンランド
セントリア先端科学大学
タンペレ大学

㉑ フランス
ストラスブール大学
パリ・ディドロ(パリ第7)大学
ブレーズ・バスカル(クレルモン第2)大学
ボルドー第一大学
パリ市立工業物理化学高等専門大学
フランス研究開発機構
ヨーロッパ理工学院パリ・デジタルイノベーション

㉒ ポーランド
ワルシャワ大学

㉓ ルーマニア
ブカレスト大学

㉔ ロシア
トムスク国立教育大学

㉕ その他締結機関
Study Abroad Foundation(SAF)
2000年に設立された非営利教育機関。
SAF参加大学の学生に対し、欧米を中心
とした大学での授業履修、語学力強化プ
ログラム、国際キャリア開発プログラム
(アカデミック・インターンシップ)を含む
幅広い留学プログラムを提供している。

2014年10月1日現在

留学生生活の過ごし方、楽しみ方

～留学後のアンケートは将来交換留学を希望する学生への情報提供のみならず派遣生自身の留学の振り返り作業としても重要な過程としています～

語学準備について

- ✦ 派遣先の出願資格が最低 B1 だったので、出願前の夏季休暇中に語学学校に通い、B1 資格を取得しました。2～3 年間学べば、取得域に達すると思います。(ケルン)
- ✦ 1 年次から英会話サークル ESS でゆるく英会話をおこなっていたが、本格的に勉強し始めたのは学部 2 年の春からで、IELTS のテキストを使い、学習した。ライティングやスピーキングはネイティブの先生やグローバル強力センターの先生に個別に対策をお願いして学習した。結果的に学部 3 年の 5 月に IELTS のバンドスコア 6.5 を取得した。(SOAS)
- ✦ 1 年生の 7 月に初めて TOEFL iBT を受け、1 月までで計 4 回受けました。リーディングとライティングを中心に参考書を利用して勉強し、ライティングはライティングセンターの先生に 2 回ほど添削していただきました。1 回目のテストで 97 点、その後なかなか点数が伸びませんでしたが最終的に 103 点を取得しました。(ヴァッサー)
- ✦ 大学入学から 1 年半、大学の授業の教科書を中心に勉強し、中国語水準試験 (HSK) の過去問をといて勉強した。HSK 6 級まで取得した。(復旦)

勉強や生活について

- 派遣先大学が指定した寮に住みました。6 人で 1 つのフラットをシェアする形で、キッチンが共有、シャワー・トイレは各部屋に設置されていたので快適でした。住み心地はいいとは言えないまでも、立地条件だけを考えたら最高の場所です。(SOAS)
- 住居費は、朝・晩の食事付きで AUS\$1,358、生活費は出かけた頻度や外食の回数によって月ごとに違うので一概には言えないが、物価は東京より少し高い感じ。特に食費が高い。(UNSW)
- 月々 239.50 ユーロでしたが住宅補助を申請したので、毎月それから 90 ユーロほど安かったです。(ブレイズ・パスカル)
- 一ヶ月の住居費は、日本円で 7 万円ほど。(ウィーン工科)
- 留学の前半は留学生 3 人と家族用アパートの一室をシェアして住み、後半はキッチンのみ共用の学生寮に引っ越し、ワンルームで生活しました。前半に住んだアパートは Opiskelijan Tampere、後半の寮は TOAS という団体から借り、どちらも申請はネットの申請フォームから行いました。どちらも住み心地は快適でした。(タンペレ)
- オーストラリアの多文化主義について学ぶことが目的のひとつだったため、現地での学習からは多くの気付きを得られた。また、多様な授業を受けて関心が広がった。(UNSW)
- シドニーは非常に多文化であるという印象を受けた。シティにも近く、大学から少し歩くと、とても賑やかなストリートがあったり、ビーチにも行くことができたり、とても住み心地が良い。(UNSW)

- 北京大学に隣接する中関新園という留学生寮。日本人寮で、全室個室（リビング・浴室は2人共有）。現地に着いてからの入寮依頼は極めて難しいので、あらかじめ大学経由で入寮依頼しておくことが必要。清潔&安全&便利（コンビニ近）で、住み心地は良かった。（北京）
- 11月から2月は、日照時間も短く極寒でしたが、それ以外は自然が多く過ごしやすかったです。（リンシヨーピン）

学業について

- 英語のクラスはアメリカとの交換留学生や、現地の中国人学生向けに1学期全学部合わせて約30コマほどあったと思う。内容は中国文化か政治経済まで様々であった。（復旦）
- 留学中にフィンランド語の基礎コースを受講していました。レベルは日常会話レベルですが、授業回数が最終的に週に4回まで及び、学習内容とその量はとても充実していました。（タンペレ）
- 学部の授業は学年や学部に関係なく自由に受講できた。ただし、すでにSOASの正規の学生でコースがいっぱいの場合は受講を断られた。（SOAS）
- 課題の量が多く大変でしたが、授業は基本的に人数が少なく集中でき、また教授もとても優しい方が多いのでOffice hourを利用して相談しにいくととても親身になって相談にのってくださいました。（ヴァッサー）
- 授業についていくのは大変。でも基本的に全ての授業でパワーポイントを使用するため、聞き取れなくても補完できる。なおかつパワーポイントのデータは、だいたい大学ホームページ上でダウンロードできる。歴史学系の授業は基本的に講義形式、討論などは少ないため、交換留学生としての立場が目立つことはあまりなかった。（北京）

交換留学に求められているものは？

- ◇ 新しい環境や慣れない環境に身を置くことを楽しむ（オタゴ）
- ◇ 語学力（復旦）
- ◇ 今までの常識にとらわれず、人と文化を受け入れる柔軟性、短期間で現地に慣れる適応力、刺激を求めて新たな境地に挑戦していける積極性、各国から集まる学生や現地の人とコミュニケーションを取れる社交性、困難に直面してもめげずに取り組んでいける意欲、大学や日本の代表として交換留学しているという責任感（ストラスブール）
- ◇ 積極性、分からないことがあっても聞き、解決するよう動くこと
- ◇ 忍耐力、好奇心、積極性、行動力、柔軟性、楽観性、日本文化の理解と知識

交換留学報告書

自分をよく知る時間

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
川上智子

イギリスのマンチェスターでは日常的に150もの言語が話されており、この多言語文化に興味を持ったことが留学のきっかけです。私は入学してすぐの夏休みに学内の短期留学研修制度を利用して、マンチェスターの語学研修を受講したので、にぎやかで生活しやすい街の雰囲気には安心感がありました。

私にとっての留学は「自分の好きなこと、嫌いなことについてのびのびと考えることのできる時間」でした。具体的な活動としては多言語環境を調査している大学の研究機関でボランティアをしたり、学業を自分が納得するまで調べ上げて課題を提出したり、友人との外食や小旅行を惜しまずに行ったりしました。自立した生活の中ではそれぞれの活動についてじっくり企画したり反省したりすることに多くの時間をかけることができます。そうして得ることのできた自分と振り返る時間は、その場を楽しむだけにとどまらず、自分のアイデンティティや将来を考えることに集中できました。

留学を通して印象的だったことのひとつに、パキスタンからの留学生との出会いがあります。彼女は記者になりたいという強い志をもち、学業はもちろん、インターンシップや他大学のプログラムにもよく参加していました。私が尊敬したのは、何度も断られても自分のやりたい気持ちを強く伝え続けたり、わからないことをそのままにせず、事務局に何度も足を運んで質問することで解決していたことです。私と彼女はお互いの文化的違いを尊重しながら、悩みや不満を打ち明けたり、将来どう生きたいかを熱く語り合ったりしました。私の拙い英語にもひたむきに耳を傾けてくれました。留学中結局できずじまいのことがあったものの、彼女のおかげで少しハードルが高いことにも挑戦する勇気が出ました。彼女を見ていて私は自分の弱みをたくさん実感したし、彼女はたくさんの私の良いところを教えてくださいました。

留学は予想するだけし尽くしも、さらにそれを上回るような大切なことをもたらしてくれます。それは人によって違うので、留学したからこそわかることだと思います。留学には様々な制度がありますが、お茶大の交換留学を目指すのなら、ぜひ前年度の人たちを参考に、自分の留学イメージを膨らませていってほしいと思います。



WHAT

イギリス・マンチェスター大学への 留学で得た「強さ」

文教育学部 人間社会科学科
グローバル文化学環 4年
齋藤美咲

交換留学は、高校生の頃からずっと実現させたかった夢でした。私は小学生の頃から世界の貧困や戦争に関心があったので、国際関係で有名なイギリスの大学を選びました。半期の派遣に決まったこともあり、英語や現地に慣れる時間を作るために8月から Pre-sessional course を受けました。エッセイの書き方や引用の仕方などはお茶大で学んだものよりも厳格だったので、大変役立ちました。ここで出会った友人たちは、正規の授業が始まった後も悩みを共有でき、お互い成長しながら励まし合う仲間になりました。

9月下旬から本学期が始まります。私は国際関係、国際経済、リーダーシップの授業を受講しました。国際関係の授業では基本理論から戦争やテロ、難民問題のケーススタディなど幅広く学びました。特に面白かったのはマスメディア以外のメディアと国際関係とのかかわりです。私自身も昔に観た映画、写真から戦争や貧困に関心を持ち始めたので、そういった媒体が人々の国際関係の見方に影響を与えるという、自分の体験を裏付けるよう

な学びがありました。一方、セミナーについていくのは想像以上に大変で、50分のセミナーで一度も発言できなかった時もありました。そんなときは本当に悔しくて、泣きべそをかきながら帰っていました。しかし、あらかじめ自分の主張を発言する練習をするように予習の仕方を変えてからは、セミナー中に自信を持って落ち着いて発言できることが増えました。日本語学科の学生や他の留学生と話すことも自分の英語力向上に役立ちました。

リーダーシップの授業ではイギリス北西部でのボランティアが義務付けられています。私は2つのボランティアを経験しました。1つはホームレスの方々への食糧配給、2つめはおとな向けの社会教育 NPO でのサポートでした。後者では知的障害のある方や犯罪歴のある方などに日本についてのクラスを開きました。地域住民と触れ合うことで、その地域を理解したり、逆に日本についての疑問が生まれたり、大変有意義でした。このように大学だけに留まらず地域活動ができたことは、私の留学の一つの大きな成果です。

交換留学全体で得た一番の収穫は、「何があっても諦めない強さ」だと思います。最初はトラブルも多く、不注意な自分が情けなくなりましたが、周りの方々のサポートのおかげで乗り越えることができました。大変だからこそ、それを乗り越えたときに得るものはたくさんあります。あきらめずに行動し続けることをこれからも大切にしていきたいと思います。



ロンドン大学 SOAS での 交換留学を終えて

文教育学部 人間社会科学科
グローバル文化学環 4年
生津千里

私が長期留学を目指したのは、1年生の春にお茶大のプログラムを利用してアメリカへの短期留学に参加したのがきっかけでした。中でも SOAS を志望した理由はいくつかありますが、一つは日本とは違った視点で開発学を学べるのではないかという期待感からです。

SOAS での一年間は、私が今まで送ってきた学生生活の中で最も大変で、そして最も有意義でした。慣れない英語での講義やディスカッション、お茶大とは比較にならないほどの課題量、書き終わらないエッセイ。日本で日本語を使って学ぶのとは勝手が違い、ディベートの授業で一度も発言できず悔しい思いをしたこともあります。それでも、自分の限られた能力の中で何ができるかを考え、友人と励まし合い、少しでもついていけるようもがいたことは、私にとってよい経験となりました。試験前に毎日図書館にこもって、必死になって勉強したことも今となっては良い思い出です。渡英直後、正規の授業が開始する前に行われた4週間の英語の補習授業のプレセッションでは、与えられたテーマに対して50分で300ワードほどしか書く事ができませんでした。しかし、留学最後の試験の時には、1時間で800ワードほどの解答を作るのもそれほど苦に感じなくなりました。それは1年

を通じた自分の成長を感じることでできた瞬間でもありました。

また、留学中には、いろいろなバックグラウンドを持つ人たちとの出会いがありました。SOAS は世界各国からたくさんの留学生が集まっていることもあり、国籍も宗教も本当に多様でした。フラットメイトは6人とも国籍が異なり、アメリカ出身の子に味噌汁のつくり方を教えるなどの交流も出来ました。

授業外の活動としては Language Exchange という Society（日本で言うサークル）に参加し、タイ人の子とパートナーとなった私は、タイ語を教えてもらいつつ日本語を教えるというセッションを毎週1時間半行いました。お互いの言語を教えあうだけでなく、文化交流も行うことができたのではないかと思います。その他にも、日本語を勉強している学生たちと交流する中で、彼らは日本で生まれ育ってきた私以上に日本語や日本文化に詳しく、日本のポップカルチャーを現地の学生から「逆輸入」のような形で魅力を教えてもらおう機会にも恵まれました。

SOAS での留学をこれだけで語りきることはできませんが、お茶大では、日本ではできなかったたくさん経験を得られたと思っています。グローバル協力センターをはじめとするお茶大の職員の方々、教授、友人、そして家族といった様々な人たちに支えられて留学という機会を得られたことに、心から感謝しています。この経験を少しでもお茶大、そして社会に還元していきたいと思います。



WHAT

イギリス・ロンドン大学 (SOAS)

文教育学部 人間社会科学科
グローバル文化学環 4年
柳下明莉



帰国してあっという間に2週間が過ぎた。留学中の時間の流れがとても早かったことを再度実感している。もっと詳しく国際関係や国際協力を学びたい、英語も使えるようになりたいという思いから留学した。

留学先の SOAS は東洋アフリカ研究所というだけあって、図書館にはそれぞれの地域の文献が豊富、もちろん日本語の文献もあった。英語での勉強に疲れた時は日本語の小説を読んでほっとしたり、日本に関するエッセイを書くのに利用したりと助けられた。また、SOAS はとても批判的な視点を持つことを大切にしている教授が多く、授業も様々な視点から国際関係を見ていくものだった。例えば国際政治の授業ではマルクス主義やフェミニズムといった理論、Identity in International Relations という授業では、社会学の理論を国際関係に応用して、国と国との関係を政治や経済だけでない面を見る視点を養った。初めは書ける気がしなかったエッセイだが、一番力を入れたものはクリスマス休暇前からしっかりと準備を始め、自分の満足度も、評価も高いエッセイを書き上げることができた。英語という面でハンディを感じていただけに、それでもここまでできたというのは自分にとって自信になった。ここまでは留学前から自分が留学に期待していて、そして得ることができたことだ。

自分のなかで予想していなかった収穫は、1人で時には友達と話しながら考える時間をたくさん持てたことだ。私は日本では7人の兄弟と一緒に暮らしており、1人の時間はあまり持ったことがなかった。ロンドンという離

れた場所で始まった一人暮らしでは、自分が使い方を決められる時間がたっぷりあり、今まで考えなかったこと、見えてこなかった部分に目を向ける機会が増えた。そのひとつが、宗教だ。いかにもお金がかかっていることがわかる立派な教会の数々、満員のクリスマスのマドリードでのミサに、とても寒いクラクフでの復活祭の徹夜ミサ、アイルランドの同性婚の国民投票とそれに対するカトリック教会の対応等々、宗教について考え直す機会を数多く持つことができた。この点については、今までほとんど批判的にみることができなかった部分、目をつぶってきた部分が多く、自分のなかでの混乱もあった。その混乱があるからこそ、新たな問いも生まれ、新しいつながりもできた。留学から帰ってきて、ある意味「日常」の生活に戻りつつある今だが、留学中に得た多くの混乱・困惑を大事にして、それを楽しむくらいの心持ちで日常、非日常を過ごしていきたい。

留学前からサポートしてくださったセンターの方々、奨学金をいただいたトビタテ、好きにやらせてくれた家族に感謝して、留学を通して得た収穫を、これから進む道につなげていきたい。



ストラスブール大学

文教育学部
人間社会科学科 4年
床枝さやか

「フランスに留学する」と言うと、よく「パリ?」「パリジェンヌになるね!」と言われますが、残念ながら(?)私が行っていたのは、アルザス地方の中心都市、ストラスブールという街です。ストラスブールは、フランスの東方、ライン川を隔ててドイツとの国境にあり、歴史の中で何度も仏領になったり独領になったりしてきたので、それぞれの文化が混在しています。そのような経緯から平和のシンボルとしての欧州議会が置かれています。昨年、創設1000周年を迎えた大聖堂を始め、多くの歴史的建造物や街並みが世界遺産にも登録されている、歴史と伝統のある、また豊かな自然に恵まれた美しい街です。

ストラスブール大学は、フランス人のみならず、世界各国から、全学生の4分の1にあたる約1万人の留学生を迎え入れている大規模大学です。大学では、良い意味でも悪い意味でも、“留学生”として特別扱いされることはなく、現地の学生と同じように授業を受け、試験を受け、評価もされます。そして様々な国の学生と交流することができました。また、課外活動では、テニスや乗馬、合気道などのクラブにも参加しました。特に乗馬は、楽しくて興味深かったアクティビティのひとつで、朝行ったら、まず馬をブラッシングしてあげることから始まり、蹄を整え、餌を与え、“意思疎通”を図った上で、ようやく馬に乗ることができます。これは私にとって初めてでしたが、とても良い経験になりました。

留学を通しての一番の収穫は、様々な人々との出会いです。偶然、同じ大学で学び、時間と空間を共有することで、その人のそれまでの人生を垣間見れるような気がしました。ユーモアに溢れ、意志が強い人、これから目標にしていきたいと思うような、尊敬できて魅力的な人にもたくさん出会えました。時には支え合い、励まし合い、楽しい時間を一緒に過ごした友達はかけがえのない宝物です。それぞれが成長した姿で、将来またどこかで再会できることを楽しみにしています。

その一方で、困難な出来事もありました。それは主に言語の壁から生じたものでした。引っ越して間もない頃に、寮の自室のトイレの水が止まらなくなり、辞書を片手に管理人に窮状を訴えましたが、運悪く週末にかかったため、4日目によりやく修理してもらうことができました。また、工事中の道路を走行中、自転車で転倒して、

左膝を3針縫うような大怪我をしたことがありました。私の気が動転している中、医学部の学生である友人が付き添って一緒に病院を探してくれたり、専門用語の多い医者話を英語でわかりやすく説明し直してくれました。この後、破傷風のワクチンを薬局で探して接種してもらいました。多くの人に変にお世話になり、感謝しています。生まれ育った国や地域、文化が異なっても、根底に流れる価値観は共通である、ということを改めて強く感じました。

フランス人には親日的な人が多く、日本や日本の文化に興味を持ち、ぜひ日本を訪れたいと言ってくれることを嬉しく思いました。そして、そのような高い関心を持って訪れてくれる人々の期待に応えられる日本でありたい、と痛感しています。そのような日本を創っていくのは、これからの私たちなのです。

留学期間10ヶ月を通して、私のこれからの人生において、かけがえのない様々な貴重な経験をさせて頂きました。このような機会を与えてくださったお茶の水女子大学、大学の先生方、家族、友人に心より感謝申し上げます。



WHAT

ブレーズ・パスカル大学 (クレルモン第2大学)

文教育学部 言語文化学科
仏語圏言語文化コース 4年
矢野智子

フランスのほぼ中心に位置する山に囲まれた地方都市、クレルモン＝フェラン市で約11か月を過ごしました。ヴォルビックのお水が湧き出るところ、ミシュランの本社があるところ、と言うと想像が付きやすいかもしれませんが、また、ブレーズ・パスカル大学と名付けられているように、フランスの17世紀の哲学者ブレーズ・パスカルの出身地でもあります。大都市東京に似たパリとはまた違った雰囲気が漂う小さな町で過ごしたことは大切な思い出になりました。勉強、生活、その他に分けてこの11か月を振り返りたいと思います。

まず、勉強について。大学生になってフランス語の勉強を始めた私にとって、2時間休憩なしで先生が永遠と話し続ける講義を聞き取り、ノートに書き留めることはたいへんな作業でした。近くにいる学生のノートを見たり、iPhoneのボイスレコーダーで録音したり、色々な工夫をしました。美術史や建築史の授業では専門用語が出てくるので最初は戸惑いましたが、音で聞き取り、頭の中でアルファベットに変換し、辞書で調べるという一連の流れは耳を鍛える上で有効でしたし、授業で何度も聞いているうちに言葉が自分のものになっていくのは日々の小さな喜びの一つでした。授業の復習は大学図書館でよくしていました。大学図書館は町のあらゆるところに点在していて、気分によって場所を変えられたのでとても良かったです。

次に、生活について。普段は、大学と図書館とパン屋さんスーパーに通う日々を送っていました。勉強にも食事にも困ることはありません。日曜日はスーパーがお昼に閉店になるので要注意ですが、パリに比べると物価も安く、パンや乳製品がとても美味しいです。寮には共有のキッチンがあるので料理もできます。私が暮らしていた寮は改装しており、キッチン以外は部屋に備わっていたのでとても快適でした。私のフロアはフランス人が多く、勉強が忙しくない頃は、クレーブパーティーがあったり、キッチンに行くと少し会話を交わしたり、部屋で一緒にフランス語字幕で日本のドラマを見たり、と充実していました。

クレルモン＝フェランは小さな町なので、コンパクトに行動できて、落ち着いて勉強し、生活したい学生には

最適だと思います。しかし逆に言えば、東京のように色んなもので溢れている訳ではないので、自分で何か計画や目的を持たない限り、ここでの生活はただのんびりしたものになってしまいます(場所にかかわらずそうかもしれないが…)。私は、最初の2、3か月は生活に慣れるので精一杯でしたが、しばらくしてから他の活動も始めました。留学する前に日本語教育の授業を履修していたこともあり、現地の日本語補習校でボランティアや、中・高校生や年配の方とランゲージ・エクスチェンジを始めました。幼稚園児から退職後の方まで、さまざまな年代の人と密接にコミュニケーションを取れたことは、ここでしかできない貴重な経験だったと思います。

このように毎週定期的な予定が入っていたので、もしかするとほかの留学していたお茶大生に比べると旅行はできなかったかもしれません。しかし、最後の1か月は現地で知り合ったご家族にホームステイするなど、この町を楽しみ尽くせたと思います。このわたしの留学生活を支えてくれたクレルモン＝フェランのみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。そして、いつか恩返しができるように頑張ろうという新たな目標ができた留学生活になりました。



留学して学んだこと

文教育学部
仏語圏言語文化コース 3年
三浦 琴

〈理由〉

フランス語を習得したかったというのが留学理由です。なぜフランス語なのかというと恥ずかしがらなくなるといのが理由です。言語習得には現地で生活するのが1番の近道と言われていたため、また長期に渡って海外で生活してみたいと思っていたので留学を希望しました。

〈留学〉

留学開始時期はほとんど話せませんでした。留学前は大学の授業でフランス語を取っていましたが特別一生懸命に勉学に励んだわけでもなく自分の自己紹介程度しかできませんでした。また現地に行けばなんとかかなると気楽に考えていたのもいけなかったと思います。留学当初こんな状態で10ヶ月間の留学を終えられないと焦りを覚えました。また留学先クレルモン＝フェランは英語が全くと言って良いほど通じない地域でもありました。どうしてもフランス語を話さなければ意思疎通ができないという状況に身を置くことができたのは言語習得にはとても良かったと思います。クレルモン＝フェランには日本人が少なかったのですがそれでも現地に日本人会がありました。その日本語補習校で毎週土曜日子どもたちに日本語を教えるボランティア活動をしました。教育専攻ではありませんが純粋に子どもと遊のが好きだったので私にとってはとても楽しいものでした。平日はフランス語、週末は日本語というようにメリハリのある生活ができたように思います。1年間お茶の水女子大学以外の場所で勉強してだいぶ強くなった気がします。当たり前と思っていた多くのことが当たり前などではなかったこと、前から留学経験者の話から聞いてはいましたが、話を聞くのと、自分で経験してみるのは全く違いました。留学を振り返ってみると、貴重な経験ができ、多くの人との素敵な出会いがあり、留学先がクレルモン＝フェランで良かったと思います。

〈将来〉

10ヶ月フランスで生活してみて卒業後はフランスで働きたいと考えています。フランス人でも仕事がない時代なので簡単ではないと思いますが、今できる目の前のことをしっかりと行っていきたいです。



現地の日本会（いちご会）の新年会にて



W H A T

ケルンでの経験

人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻 生活政策学コース
山本菜月

私の留学の目的は、ドイツで調査をすること、ドイツ人らしい生活を理解することでした。というのも、修士論文ではドイツ人に調査をして書くこと、と決めていたので。だから、留学することが決まった後も十分な準備を重ねました。ところが、ケルンに住み始めて以来、何でも地域ごとに言葉も習慣も考え方も違うのに驚きました。準備したつもりだったのに、ドイツ語でおしゃべりできないし、単調な語彙でしか自分の意見を言うことができないし、ないないづくしでした。困りごとがあるたびに、家族に「助けてー」なんて言っていたのですが、当然誰も助けに来ません。最終的にはもちろん生活が楽しい、帰りたくないって思うほどケルンでの生活が好きなになりましたが、泣いてしまう日もたくさんありました。さて、ケルンにいる間に、私は2つほど気づいたことがあります。一つは、自分には自立心がないなっていうこと。ドイツでの調査で「あなたは自分のことを、大人になったと思う？自立していると思う？」と聞いているのに、当の本人が全然大人になっていないと思ったこと。気付いてから、どうすればいいかなって考え、いろいろ試してみましたが、結局まだ子どもっぽいまです。もう一つは、自分が今まで住んだり、いたりした場所について、何も知らなかったということ。よく留学に行くと、日本のことを説明できなくてバカにされるというエピソードがありましたが、私もそのバカにされる一人です。ケルンは今現在の街並みが、戦争で破壊されたとはいえ、元通りに修築し、昔ながらのような景観を保った場所もたくさんあります。なぜこんな街並みになったのか、1年間通りを歩きつくして、街の端から端まで電車に乗って調べました。合理的で、驚くような歴史的な謂れをたくさん知りました。新しいことを知るたびに、自分が日本で住んでいた街について、何の知識も持っていないことを反省し、反対に調べ始めたりもしました。

休日は歩き回る一方で、大学での授業はよく挫折していました。「準備したんだからきっと何でもできる」っていう格好いい私はどこにもいなくて、議論に参加できず、的確な指摘もできず、宿題だって最後までやり終わらないこともありました。後期に入り、授業が分かるようになったり、質問できるようになったり、少しずつ進展がみられるようになりましたが、それでもまだまだ不十分

です。これは今後も研鑽し続けなければならないことの一つです。また、そのために留学したんだから、当然ですが、調査・研究も行いました。ドイツ人相手のインタビューは、毎回緊張するし、反省点が多々あります。調査をするにあたって、多くの友人や教員がアンケートの配布やインタビューの協力者探しを手伝ってくれました。コメント欄には多くの人が、厳しい指摘や応援のメッセージを書いてくれました。それが調査中の私にとって、どれだけの励みになったか…感謝してもしきれません。これらのデータを基に、少しでも完成度・社会的に貢献度の高い論文を書き上げることが、今の私の目標です。

最後になりましたが、ドイツでの滞在に関わってくれた全ての人に感謝したいです



Meine Erfahrung in Köln

Mein Auslandsstudiumsziel ist das Ausführen einer Untersuchung in Deutschland und die Aneignung des deutschen Lebensstils, denn für meine Masterarbeit brauche ich auch Untersuchungen mit Deutschen Teilnehmern. Deshalb war ich genügend vorbereitet.

Zuerst habe ich mich erschrocken, dass alles unterschiedlich ist je nach Region. Außerdem konnte ich auf Deutsch nicht gut plaudern und meine Meinung ausdrücken wegen meines geringen Wortschatz. Zwar hat mich jedes Mal meine Familie durch Skype unterstützt, aber natürlich ist niemand zu mir her gekommen, um mir zu helfen. Aber habe ich schließlich mich an das Leben in Deutschland gewöhnt.

Während meiner Zeit in Köln habe ich einiges bemerkt. Zum ersten mangelt es mir an Selbständigkeit, obwohl ich eine Untersuchung über „Unabhängigkeit von Studenten“ gemacht habe. Ich kann nicht auf eigenen Beinen stehen. Seit meiner Erkenntnis hat sich das Problem nicht aufgelöst, auch jetzt noch ziehe ich mich kindisch an. Zum zweiten wusste ich gar nichts über den Ort, an dem ich war oder gewohnt habe. Jeden Tag bin ich überall in Köln gewesen. Dabei habe ich immer verschiedene Kenntnisse, dass Köln aus Grünanlagen und Geschichte besteht, bekommen. Und ich dachte über meine Unkenntnis nach.

Lernen an der Uni war mir zu kompliziert. Ich war nicht großartig dabei. Das bedeutet: immer an der Diskussion teilzunehmen, immer gute Fragen zu stellen usw. Im Sommersemester habe ich manchmal den Unterricht gut verstanden, aber das war noch nicht genug. Außerdem habe ich die Untersuchung mit Deutschen im Sommersemester, die mein wichtigsten Ziel in Auslandsstudium ist, durchgeführt. Das war sehr interessant, zugleich aber auch sehr schwer und ganz unterschiedlich als wie in Japan. Viele Freunde von mir und auch viele Professoren haben mir geholfen, um die Umfrage zu verteilen oder zu interviewen. Diesen Datensatz kann man in Japan in keinster Weise zu hören und sehen bekommen. Nicht nur bei Mithelfern sondern auch Freunden und Professoren bedanke ich mich herzlich. Ich habe

scharfe Kritik und zugleich Ermutigung bekommen. Diese Kommentare haben mich sehr ermutigt. Ich studiere sehr fleißig weiter, um diesen Datensatz gut auszuwerten.

Zum Schluß danke ich nochmal Mithilfern, Freunden, Lehrern, meiner Familien und Deutschland.



WHAT

ドイツ留学 (ヴァーギシェ・ヴッパタール大学)

理学部物理学科 3年
岩井綾香

私は、2014年の10月から半年間ドイツのヴッパタールという都市に滞在しました。ヴッパタールは田舎で閑散としていますが、大都市であるケルンや日本の商業地デュッセルドルフまで電車で20分強でいけるので、とても住みやすいところです。

ドイツでの留学を決めた理由は、ドイツの国民性や文化に興味があったからです。勤勉で合理的で徹底的に物事を突き詰める性格を持つドイツ人の特徴は、歴史上の人物にあらゆる分野で偉人の多いところに現れています。そして音楽や芸術を愛し、お祭が大好きなドイツでの生活は毎日飽きることがありませんでした。

ヴッパタール大学は、お茶大理学部が協定を結んでおり、専門分野の学習体系も充実しているので大学を選ぶ決め手となりました。わたしがとっていた授業は、物理の科目では“accelerator physics”と“theoretical calculation”という二つです。前者は院生向けの少人数制の授業で、専門性が高く、授業に付いていくのに大変でした。課題がだされた時は周りの人に手伝ってもらっていました。後者は大学生向けの授業で、40人ほど参加していました。こちらは、知っている内容が多かったので比較的わかりやすかったです。どちらも英語で受けていました。理系以外の教科は、ドイツ語の基礎授業と英語のコミュニケーションの授業を取りました。

学部留学生はわたし一人でしたが、同じ時期に理学部の院生の先輩が5人いらしたので、事務的な手続きを一緒に行ったり情報交換もできて大変心強かったです。試験前などは勉強に追われて大変そうでしたが、一所懸命励む姿を見て、もし自分も院でもう一度行くなら先輩方を見本にあんな風に頑張ろうと思いました。

語学の上達は留学生仲間との会話が一番です。毎週、学生団体によって行われる留学生向けのイベントがあり、多くの人と接する機会になりました。ドイツ語は最初は不安でしたが、授業以外でも部屋でドイツ語のテレビをたくさん観たり、極力ドイツ語で友人の会話に参加するなどして少しずつ克服しました。木曜日には仲良しのグループで大学に付属されているバーでお喋りをし、時間があれば同じ寮の友達の部屋で食事をしたりと毎日が楽しい時語学授業のようでした。ハロウィンパーティやカーニバルに参加したこと、クリスマス休暇はフランスの

留学生の家に滞在しヨーロッパの家庭のクリスマスを体験したことは一生忘れることのない思い出です。

留学経験で学んだことは、まずはトラブルに対応することです。異国の地で一人で臨機応変に対応しなければならないので、自分で考えて行動することができるようになりました。交通機関のストライキなど想定外のことが起きても、ゆったりどっしり何事も受け入れることも必要です。

それから、ドイツや他の国々の国民性を知ること、日本のよさに気づくことができました。日本人は自己主張が苦手ですが、他者の気持ちを推し量ったり争いを避ける気遣いをするとところが他の国にはない美点だとも思います。価値観の違う人たちと触れ合って、自分と違う意見を受け入れ、また自分の考えを発信していくことを忘日々心がけていきたいです。



交換留学を終えて

人間文化創成科学研究科
ジェンダー社会科学専攻
生活政策学コース 2年
小林美晶

私が交換留学に参加したいと考えた理由は、将来英語教員または英語を活かした職業に就くために、英語を支障なく使えるようになりたかったこと、そして以前から興味があった北欧の社会福祉や文化に触れたいと考えたからです。スウェーデンを希望した理由は、ほとんどのスウェーデン人が流暢な英語を使えるため英語圏として留学しても問題ないと感じたこと、そして現地の学校に訪問して様子を見学したかったこと、社会福祉について実生活を通して体感したい、ということを考え応募しました。学部時代は、自分に留学なんて無理と思い込んでいたため応募すらしませんでした。しかし、修士課程に入ってから、留学したいという思い、今回の留学の機会を逃すと将来きっと後悔するという思いが膨らんできました。修士で留学するなら、調査や研究の一部を行わなければ意味がないというイメージもあり、決心するのに時間がかかってしまいましたが、国際交流センターの方々に相談し、フォローしていただいたおかげで、行こうという決意を固めることができました。現地では、スウェーデン国籍を持つ人は、学費が完全に無料であるため様々な年齢の人が学生で、私が留学前まで気にしてい

た交換留学は学部生のためのもの、という考えはすぐに払拭されました。スウェーデンでは高卒後すぐに大学に行く人ばかりでなく、就職後に大学に入ったり、転部や大学に入り直す人も多いため学生の年齢は多用でした。人生の節目のタイミングなど、あらゆることについて個人の選択したことは多様で当然という考えが尊重されており、自由度が高い中で生活することができました。

また、留学生だからでなくて、知らなくて当たり前という態度を身につけられたことで、自分が知りたいことに対して食欲に行動することができました。例えば、教育実習の授業は教諭経験者が対象であったものの、相談のうえで受講したり、また現地の大学院生向けのソーシャルワークの授業でも、クラスメイトの協力を得ながら分からないなりに勉強することができました。ソーシャルワークを専門とする現地学生、留学生と同じ授業を取ったことで、社会福祉のあり方や、社会福祉の現状について彼らがどのように考えているか、その一部を知ることができました。

留学を経験した結果、それまで想像していなかった人とのつながりや興味が生まれました。目標としていた使える英語を身につけること、そして今後研究したり深めていきたいテーマについてじっくり考えたり、行動する時間をいただくことができました。今回参加することができて、現在本当にやりたい方向に進めていると感じています。多くの方が今後も様々な留学の機会に参加できることを願っています。



W H A T

プラハ・カレル大学（チェコ共和国）

文教育学部人文科学科
グローバル学環 3年
倉又瑞希

2014年9月から2015年6月までの約9ヶ月、プラハ・カレル大学に留学させていただきました。

現地では、東欧の歴史を中心に学びました。ヨーロッパの国際関係や文化の交流の仕方に関心があったためです。中東欧を俯瞰しつつ500年間を通観する授業や、反体制派の人々に焦点を当てる授業、戦後のチェコ史を映画から見る授業など開講されている授業は非常に幅広く、選ぶのにも苦労しました。これらの授業から、日本での知識と併せて、切り口を変えようと、歴史はどのようにも見え方が変わるのだということを実感しました。さらに、歴史の舞台を実際に訪れて、その地の自然や文化に触れ、そしてその向こう側にある歴史について考えるのは、素晴らしい経験でした。

留学してよかったこととして第一に挙げたいのは、人との出会いです。チェコ人学生や各国からの留学生から話を聞くと、欧州では大学を卒業後もう一度別の学科に入学しなおしたり、就職してから大学院に行く人も多いなど、人生の選択が幅広いように思われます。現地の日本人にも様々な方がいました。例えば、夢を叶えるためにチェコの美大に留学している方、「ヨーロッパに住みたい」という一心でチェコに来ていてる方、操り人形の職人さんなど、挙げれば限がありません。彼らからは、色々な生き方があるべきだと教わったように思います。

学業の外でも多くのことを学びました。様々な国籍・年代の学生との寮での生活は、視野を広げるよい経験になりました。また、欧州諸国のいくつかの歴史を扱う博物館を訪れたことから得るものが大きかったように思います。中でも印象深いのは、エストニア・タリンの占領博物館とフィンランド・タンペレのレーニン博物館です。両館を続けて訪れたのですが、共産党支配、さらには共産主義への評価の違いが各館の展示においてははっきり現れていました。また、15世紀のフス戦争時に急進的フス派の拠点となった街である、チェコ・ターボルで訪れたフス派博物館においては、彼が英雄として祭り上げられた18世紀の過程そのものを見ているような展示がなされていました。上述の歴史の見え方について考えていた折でしたので、翻って、日本におけるナショナリズムについても気があったように思います。

さらに、チェコ日本友好協会を通じて現地の方と交流することが出来ました。また、そこでボランティア活動を行い、日本文化紹介のイベントなどに関わらせていただいたこともよい経験でした。

わたしは人見知りで引っ込み思案で、留学に行くを決めるまでも悩んで、行ってからも辛い思いも後悔も沢山しました。しんどくなったらヴァルタヴァを眺めに出かけ、行き詰まったらオペラを観に行き、騙し騙し9ヶ月を終えたというような印象もありますが、それでも替えがたい経験ができたことは確かです。関わったすべての人への感謝は、しても尽くしきれません。この経験を今後生かしていくことが一番の恩返しになるのだろうと考えています。



ウィーン工科大学の留学を終えて

生活科学部
人間環境科学科 4年
江原 望

あまり興味を持っていないと気づかない人も多いようですが、お茶大はとても留学の制度が充実している大学です。長期休みごとにおこなわれる短期研修も、半年～1年間にわたる長期留学も、行き先が多様で、奨学金等の制度も充実していて、少ない学生数にも関わらずとてもチャンスに恵まれています。私もその恩恵にあずかった一人です。

一年生の夏にオーストラリアの UNSW 大学での短期研修を経験し、いっそう長期留学への想いを強めた私は、二年生の後期の半年間、オーストリアのウィーン工科大学に長期留学をさせていただきました。

学部の二年生ということで、まだ専攻・研究についてもあまり見通しのない状態でしたが、学科の勉強のうち建築や人間工学の分野に興味があったため、どちらの研究もおこなわれているウィーン工科大学は私にうってつけの留学先でした。大学では英語で授業を受け、悪戦苦闘しつつもヒトのケガのメカニズムや、住環境について

の授業を受けていました。ウィーンは世界でも有数の文化的な都なので、教科書に出てくるような建築物をこの目でたくさん見て、感じる事ができたのも、素晴らしい体験でした。

大学の勉強以外に得たものも、本当に多いです。まずドイツ語。大学外のドイツ語学校に通ったので、国籍も年代も多様な友人がたくさんできました。日本人コミュニティももちろんありましたが、音楽大学の方などが多く、自分が今までかかわりのなかった世界の人との交流がたくさんありました。ウィーンフィルと楽友協会のイメージのとおり、クラシック音楽ファンにとって大変魅力的な都市です。私は渡航前ではそうでもなかったのですが留学中にすっかり覚醒し、今では iPhone のプレイリストがすっかりクラシック一色になっています。笑

EU 圏内ですので、近隣諸国への旅行のしやすさも魅力でした。オーストリアの周辺国であるドイツ・チェコ・スロバキア・ハンガリーに出かけました。

留学を迷っている人は、思い切って飛び出していくのが良いと思います。環境が整っていて、自分の気持ちさえあれば、何も怖くありません！応援しています！！

このような機会をくださった大学に心から感謝しております。

Vielen Dank.



W H A T

フィンランド（タンペレ大学）

文教育学部人文科学科
哲学・倫理学・美術史コース 4年
河澄紗羅

「君はフィンランドへ9ヶ月の交換留学に行くことになるよ」と言われても、入学したての私は笑って信じなかったと思います。実際、入学当初の私には留学するつもりは全くありませんでした。それどころか1年生前期の履修申請の段階では知らない人と話すのが煩わしいという理由で英会話の履修を避けたくらいの人見知りで、留学なんて到底できるはずのない状態でした。しかし、入学当初から興味があった北欧神話の研究をするには、日本では資料が不十分であることに気づき、1年生の10月、北欧神話の本場への留学を目指すようになりました。

私が留学して一番良かったと思うことは、異文化に直接触れて理解を深める経験ができたことです。北欧神話に関連する遺跡・遺物の一部を目の当たりにして細部まで様々な角度から見ることは、現地に行かなければできません。フィンランド神話に謳われた気候や植生も、実際にフィンランドの森を歩いて自分の目で確かめること

で、理解がずっと深まるように思います。そして、夏から初夏にかけてタンペレの街に住んで経験することで感じた、長い冬とその後に来る春・夏を喜ぶ人々の気持ちは、北欧の夏至祭に焦点を当てた私の卒論の原点となりました。

もちろん留学期間中には困難なことも経験しました。北欧の福祉制度に興味を持って社会科学の授業を履修したものの、知識不足のためレポート作成が思うように進まず単位の取得を諦めてしまったことは一つの挫折経験ですし、ルームメイトになかなか相手にされず悔しい思いをしたこともありました。そんな時は9ヶ月しかない留学期間なのだからと割り切り、専門の勉強や、なりゆきでリーダーを務めることになった現地の日本文化サークルの活動など、自分が本気でやると決めたことに打ち込むことで、気持ちの切り替えを行っていました。この経験は、将来仕事などで困難にぶつかった時にも活かせるものであると確信しています。

これからも多くのお茶大生が志をもって交換留学という貴重な機会に挑み、素敵な経験を積んでいかれることを願っています。最後に、この留学のためにお世話になった多くの方へのお礼をもって、結びとさせていただきます。本当にありがとうございました。



写真：湖とランドマークのテレビ塔に
彩られた、タンペレの街並み

セントリア先端科学大学

文教育学部
人文科学科地理学コース 4年
多田佳乃子

大学生のうちに長期留学に行こうと決めていたものの、実際に交換留学に応募するのは予想以上に勇気のいる行為でした。現地で友達はあるだろうか、英語で行われる授業についていけるのだろうか。留学が現実的になるにつれ、不安な気持ちが増していったのを覚えています。しかし留学を終えた今、あの時勇気を出して長期留学に応募して本当に良かったと思います。留学を通して様々なことを学び、大きく成長することが出来たと思うからです。では実際どのような留学生活を送ったのか、以下に紹介します。

セントリア先端科学大学では、観光学のコースを履修していました。ほとんどの授業が生徒同士のプレゼンテーションやディスカッションで成り立っていたため、授業中に自分の考えを上手く伝えられず、もどかしい思いをすることも多くありました。しかし、良いプレゼンテーションをすると他の生徒が「すごく良い内容で勉強になった」と、わざわざ伝えに来てくれることもあり、非常にやりがいのある授業でした。また、クラスの中で様々な国からやってきた生徒とディスカッションをすること

は、とても良い経験となりました。ハンガリー、ギリシャ、モロッコ、バングラディシュやネパール出身の生徒など、宗教も違えば価値観も異なるため、時に生徒同士の意見の衝突もありましたが、それらにしっかり向き合い、みんなで話し合う中で、真の異文化理解が出来たと思います。

また、留学は大学の授業だけではありません。長期休み際には友人とラップランドに旅行し、サンタクロースに会ったりオーロラ観測に出かけたりするなど、フィンランドならではの体験もしました。また普段は大学の授業以外にも、地元の語学学校に通い、現地の様々な年齢層の方々と交流をし、大学キャンパス内で行われるイベントにも積極的に参加するようにしました。勉強の息抜きに友人と食事をしたり、映画を観たりしたのも良い思い出です。

もちろん、留学は楽しいことの連続ではありませんでした。極寒の冬の気候に悩まされたり、いくら予習をしても授業中のディスカッションにうまく入れなかったりと、挫折を味わったことも数多くありました。ただ、それらを乗り越えたことで大きな自信がついたのは確かです。また、何事も自分で乗り越えなくてはならないという意識が芽生え、行動力もつきました。かけがえのない友人や、親友も出来ました。フィンランドに留学して良かった、留学生活を振り返ってみて、改めてそう感じます。



WHAT

ポーランド・ワルシャワ大学で 学んだこと

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 4年
伊藤智恵

ポーランドワルシャワ大学で交換留学として半年間学びました。ワルシャワはポーランドの首都で、緯度は北海道より高く、冬にはマイナス15度になるほどとても寒い国でした。私は、広告心理学、国際関係、グローバルプロブレム、ポーランド史、ポーランド語の授業を英語で履修していました。留学生は英語の授業に参加することも、またポーランド語で開かれている授業を履修することも可能でした。特に広告心理学の授業では、自分で考えたキャッチコピーを他の学生とシェアしたり、日本の広告についてディスカッションをする場もありました。この授業は特に力を入れて履修しており、最後の成績でAという一番良い成績をいただけたことはとても大きな自信に繋がりました。私は興味のある授業を学部を問わずに選んで履修し、空いていた金曜日には日本学科の授業でTAをしていました。今日本で流行っているものは何なのかなどについて授業の中で発表させてもらう機会もたくさんありました。

また、ポーランドは生活費が東京の3分の1ほどで生活費に困ることはなく、他のヨーロッパの国々とも隣接しているため、たくさんのヨーロッパ国々を巡ることもできました。例えば、イギリス、チェコ、ハンガリー、オーストリアなどへ旅行に行きました。また、留学生た

ちは取れる授業の上限があり、週に5コマほどしか入れることが出来なかったため、空いた時間を使ってポーランド国内の旅行もよくしていました。またクリスマスの時期には友人の家で1週間ホームステイをさせていただきました。私が行かせてもらったお家はザモシチというワルシャワから車で3時間半離れた場所で、そこでポーランド式の伝統的なクリスマスを過ごしました。教会へ行ったり、何十人もいる親戚の方達一同とお食事を何度もしました。このホームステイでは家族の皆さんとポーランド語で話していたため、片言ではありますがポーランド語を上達させることもできました。

私がポーランド留学を決めた理由は、日本語教育と英語の両方を学べる場が欲しいと思ったからです。日本で日本語を学ぶ留学生の方達を接する中で、今度は外国語環境下で日本語がどのように学ばれているかに興味を持ち、日本語教育が熱心に行なわれているポーランドワルシャワ大学へ留学することを決めました。また、授業の多くが英語で開講されていることもワルシャワ大学に決める大きな要因になりました。やはり英文科ということで英語の能力は向上させたいと思っていたので、日本語教育と英語の両方を学べるワルシャワ大学は私にとって正しい選択でした。そして懂れていたワルシャワ大学日本学科で教員を務める岡崎先生とも親睦を深め、岡崎先生の別荘にも遊びに行かせてもらうことが出来ました。岡崎先生から教わったことは決して日本語教育に関するだけでなく、40年以上の間日本から遠く離れたポーランドで日本語を教え続けているという生き方から、一生を通して一つのことを成し遂げる大切さも学びました。



ヴァッサー大学交換留学体験記

文教育学部言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
神門ちあき

ヴァッサー大学はマンハッタンから電車で2時間ほど北にあるポキプシーというところにある、リベラルアーツカレッジです。学生数は2,500人ほどで、教室移動をするたびに友達一人は必ず見かけるといっても過言ではないほど小規模な大学です。歴史ある建物はどれも趣があるものばかりで、自然あふれるキャンパスは毎日過ごしていても飽きることがありません。そんなアメリカ有数の美しいキャンパスを持つヴァッサー大学は非常にリベラルな校風をもつ大学で、個性豊かな学生にあふれています。「アメリカ文化とジェンダーを学びたい」という理由で女性学や映画・演劇が盛んなヴァッサー大学を志望しましたが、現地での生活は私が想像していた以上に刺激的で充実したものでした。

ヴァッサー大学で学んでいる期間、私はその教育の質の高さを常に感じていました。学生数が少ないため、一人の教授に対する学生の割合も低く、多くの授業が学生数20人前後の少人数で行われ、10人以下の授業を履修したこともありました。履修の制限は基本的になく、幅広い分野の授業から自由に選ぶことが出来ます。秋学期は Women's Studies, Film, American Studies, English、春学期は Psychology, Drama, Anthropology, English を履修しました。ヴァッサーには留学生用の語学クラスがなく、最初から現地の学生と同じ条件で授業を受けるため、はじめは緊張の毎日でした。アメリカ留学を経験した先輩や友人から「課題に追われる日々だ」という話を聞いていたので、覚悟をして留学生活に臨みましたが、噂通りの膨大な課題の量と慣れないディスカッション中心の授業に、最初は圧倒されました。心が折れそうになる時もありましたが、「折角の留学を無駄にしたくない!」という思いで、周りに励まされながら取り組みました。履修していた授業の教授は優しくてフレンドリーな方ばかりで、相談に行くたびに親身になってアドバイスをしてくださり、私のことを知ろうとしてくれたことで、授業に対するモチベーションを高めることができました。また、課題でエッセイが課されたときにはライティングセンターで、文法的なミスや内容を見てもらいました。そして徐々にエッセイの書き方が分かるようになりました。また、同時に添削してもらい際に内容を説明しなくてはいけないので、エッセイに書いた自分の意見ときちんと向き合うことが出来ました。当時は授業についていくので精一杯でしたが、今振り返ると「この授業でこんなに学んだ、こんなに知識が増えた」と実感できるものばかりです。終わらないリーディングや尽きない課題と向き合う日々は決して楽ではありませんでしたが、あれほど学業に打ち込めて必要なサポートが存分に得られる環境で学べたことを、とてもありがたく思います。

そんな私の忙しくも楽しい留学生活を語るのに欠かせないものは、留学生活を通して築いた友情です。授業や課外活動を通して多くの友達が出来ましたが、その中でも毎日と共にしたフェローグループの人々は私にとって家族のような存在でした。ヴァッサーでは、新入生、転入生、交換留学生は10人前後のフェローグループに分けられ、そのメンバーが同じ寮の同じ廊下に住むことで協力しながら関係を深める、というシステムがあります。

交換留学生は基本的に TVE (Transfer, Visiting, Exchange students) というアメリカ国内の大学からの編入生と他の国からの交換留学生からなるフェローグループに分けられ、私が留学した年には2つの TVE グループがありました。アメリカ、中国、ブラジル、イギリス、トルコ、マレーシア、フランスという多国籍な TVE グループのメンバーたちが留学を通して得たかけがえのない友達であり、留学中の一番の理解者でした。9か月の留学の間、一度も日本に帰りたと思わなかったのは、励まし合いながら課題をしたり夜遅くまで悩み事を聞いてくれたりした、彼らがいたからです。よく学びよく遊び、自分らしさを持った彼らと過ごしていると、「自分がどういう人物なのか」というのが徐々にはっきりしていくと同時に自分の視野が日々広がっていくのを感じました。留学中様々なことを経験しましたが、今振り返ると、毎日一緒に食べた夕食や、廊下での何気ない会話が一番の思い出です。嬉しいときも悲しいときも、ありのままの自分をさらけ出せる人々に出会えたこと、また彼らと私の人生で最も重要な9か月を共に過ごせたことを、心から幸運に思います。

もちろん授業の中で学ぶことはたくさんありますが、ヴァッサーでは授業外での人との関わり合い、ヴァッサーという社会で生活する中で学ぶことがたくさんあると思います。ヴァッサーで過ごして強く感じたことは、人種差別や性差別、富裕層と貧困層の差、セクシャルマイノリティに対する偏見など、アメリカ社会に存在する問題の根深さとそれらに対するヴァッサーの学生の関心の高さです。日本だとあまり議論されないような問題やセンシティブな問題も、日常の会話の中で積極的に議論されています。多くの人と交流して多様な価値観に触れることで自分自身の意見を持ちそれを発信する力が付いたことが、留学で得た一番の変化です。留学中は自分の成長に気づきにくいかもしれませんが、終わってみて振り返ると「私ってこんなに変わっていたんだ」と必ず感じます。今留学中の方も、これから留学を考えている方も、プレッシャーを感じ過ぎず、自分らしく楽しく留学生活を送っていただきたいです。

最後になりましたが、ヴァッサー大学という素晴らしい環境で学ぶ機会を与えていただけたこと、また、留学準備期間から帰国まで応援してくれた家族、先生方、友人に感謝いたします。



友達の誕生日に近くのレストランで夕食を食べたときの写真です

W H A T

南オレゴン大学

文教育学部 言語文化学科
日本語・日本文学コース 3年
三浦夏乃

私は日本語学を専攻しており、日本語や日本文化を海外の視点から研究したいと思い留学しました。南オレゴン大学で交換留学生として過ごした1年を幾つかの点から振り返ってみます。

まず、学業について。最初は、膨大な課題と学生の熱いディスカッションに圧倒されていました。しかし、負けず嫌いな性格なので人一倍努力して勉強しました。例えば、リーディング課題で未知の単語に出会う度に単語帳に書き留めていたのですが、こうして留学中に覚えた単語は1万語を超えていました。このような結果、徐々に授業の理解度は上がり、積極的に発言や発表をしたり、試験で一番になったり、更には先生に授業の題材を自ら提案するようにもなりました。最終的に大学で成績優秀者に選ばれたのはとても嬉しかったです。

次に、生活について。大学のあるアシュランドは小さな町ですが、演劇が非常に盛んで、8ヶ月半にわたって770回以上の公演が行われるシェイクスピアフェスティバルで有名です。演劇好きの私にとってはまさに夢の国で、ほぼ毎週末舞台を観に行っていました。私のルームメイトは演劇学を専攻していたため、いつも部屋でも演劇の話ばかりしていました。このアメリカ人のルームメイトは、偶然とは思えないほど性格も趣味も合って、私

の留学生活においてとても大切な存在でした。

次に、文化について。最初はアメリカの文化に適応しようと、無理にパーティーで騒いだり、挨拶として慣れないスキンシップをとったりなどにかく躍起になっていました。しかしそれは私にとってストレスでしかありませんでした。そんな時、同じ留学生でも自国の文化に誇りを持って堂々と生きている友人に気付かされたのは、ここは個人主義・多民族国家アメリカだということです。「これが私の文化だから」という基準で行動できるようになり、日本人らしくいること、自分らしくいることの大切さを学べました。

最後に、今後について。もう一度海外で学びたいと強く思います。1年という期間は本当にあっという間で、まだまだ海外で学び足りないことが沢山ありました。できれば今度は海外の大学院で研究したいと考えています。そして、ゆくゆくは世界で活躍する研究者になりたいというのが私の昔からの夢です。しかし、現実的には海外はおろか日本で研究を続けられるかも分かりません。それでも、私は自分の出来る限り夢を追い続けたいと思っています。

最後の最後に、留学に興味を持って読んで下さった方へ。私の祖父は若い頃、アメリカの大学で研究をしていました。祖父は、自分でアメリカの大学に手紙を出して直接交渉し、船で約2週間もかけて渡航したそうです。それに比べたら今は、飛行機もインターネットもあり、ずっと簡単に留学することができます。少しでも留学したいという思いのある方は、ぜひ挑戦してみたいかどうかででしょうか。



長期留学生生活を振り返って

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 4年
高木優希

私は3年次後期から1年間、オーストラリアはシドニーにあるニューサウスウェールズ大学（通称 UNSW）で、交換留学生、またトビタテ留学 JAPAN 1期生として開発学や国際政治を学んできました。振り返ってみると、この1年ほど自己に向き合った日々はこれまで無かったでしょう。たくさんの学びや新しい経験を得られた一方、楽しいことばかりではなく悔しさや情けなさを日々感じつつなんとか1年を過ごすことができました。それでも、帰国から半年経った今はあの突き抜けるようなシドニーの青い空を懐かしくも感じます。

UNSW は世界大学ランキングにもランク入りするだけあり、オーストラリア国内は勿論、世界中から留学生が集まる大学です。海外の大学で異なる学びに浸かりたいと考え志望した留学でしたが、優秀な学生に囲まれて日々授業を受けられたのは期待以上に非常に良い刺激になりました。自分がどう考えているのか、何故そう考えるのか、その思考の道筋は正しいのか、そのような思考訓練を英語環境下で行うことができたのも留学してよかったと思うことの一つです。また、いわゆる White の先生だけではなくバングラデシュやタイといった海外出身の教授に多く学べたのも、この多文化主義国家の大学で学ぶことの大きな意義となりました。チュートリアルでは、各々異なる文化背景を持つ教師と学生の意見が飛び交い私も日本人としてその考えを問われることもありました。講義によっては時にその活気ある雰囲気から気圧されることもありましたが、自分の考えをしっかりと持ちそれを表明することの大切さを、身を持って学ぶことができました。

大学を離れてみても、多くの人が入り混じるシドニーで暮らした1年で日本には知り得ない多くを経験しました。不思議なことですが、この街において自分はたった1年しか暮らさない外国人である、ということを忘れてしまうような居心地の良さを感じる他方で、ときには自分はアジア人で日本人の女性である、というカテゴライズされた自己認識を強く感じるといった、相反する感覚を覚えることも。アイデンティティの揺れとまではいかないまでも、日々多国籍な友人や同級生と過ごすことで自分は何者なのかということを気負わずに海外の地で考えられたことは、ずっと自分の記憶の中に残り続ける

のではないかと思います。

その他にも3か月の長い夏休みには現地でアルバイトやインターンをして海外で働くとは如何様なものなのかを学生のうちに多少知ることができたこと、オーストラリア国内を友人と旅したこと、ここでは全てを書ききることのできぬ凝縮された1年でした。留学先での出会い、この留学派遣にあたり出発から帰国までご指導サポートをしてくださった大学の方々、教授に感謝申し上げます。



WHAT

ニューサウスウェールズ大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
横川和花

私は2015年2月から12月までオーストラリアのシドニーにあるニューサウスウェールズ大学で交換留学をしていました。留学することをやめようかと思う時期もありましたが、今では留学をして本当によかったと思っています。

〈授業に関して〉

授業はアジア研究、教育、日本語教育、多文化研究についての授業を履修していました。私がもっとも関心のあった授業はアジア研究に含まれる‘Japan and Korea’でした。私が履修登録をしている時に、すでに定員に達しているほどの人気の授業でした。しかし、先生にお願いをして、履修させていただくことができました。人気とだけあって、授業と学生のレベルはとても高かったです。リーディングは多いだけではなく、難しく、毎週ついていくのが大変でした。しかし、今でも授業を共に乗り切った友人とは楽しく授業の思い出を振り返っています。また、後期には日本語の教育実習をさせていただきました。初めは自分の授業が思うようにいかず、何度も悩みましたが、最終的には、学生のことをメインに考えた授業ができるようになりました。実習を通して、自分の将来について考えるきっかけもいただきました。また、日本語を勉強している学生には何度も刺激を受け、彼らのおかげで、学期中の大変な時期も乗り切ることができました。

〈授業外の生活〉

授業外では学期中は週末も含め、友人と図書館で勉強していることが多かったです。友人と一緒に勉強することによってお互い助け合うことができ、より仲も深まりました。また、授業の空き時間は地元のカフェでアルバイトを行っていました。非常にローカルな雰囲気の中で職業経験を積むことができ、とても面白かったです。

長期休み中はバイトをしたり、旅行をしたり、読書をしたり、友人と出かけたり、映画をみたり、写真撮影にかけたりと学期中にはできないことをしていました。

〈寮生活〉

キャンパス内にある、朝晩のごはんがついている

UNSW Hall という寮に住んでいました。ごはんをいつも一緒に食べるので、寮の友人とはとても仲良くなりました。また、自習室もあるため、夜中まで友人とまじめに、ときにおしゃべりも挟みながら勉強していました。卓球台やビリヤードがある部屋もあり、学期の終わりにはそこで友人と明け方までおしゃべりをしたり、遊んだりしていました。また、長期休みで寮のほとんどの学生が帰省してしまったときは、残った人より仲良くなることができました。毎晩映画をみて、おしゃべりをして、時には出かけて、とても楽しかったです。

この10ヶ月は楽しいことだけではなく、大変なことも多かったですが、大変なことがあったからこそ、貴重な学びを得ることができ、大切な友人に出会うことができたのだと思います。また、大変なことは過ぎてしまえばいい笑い話になることも多いです。別れが惜しいほどの出会いができ、新しい考えに触れることのできた交換留学は私にとって一生の宝物です。お世話になった方全員に感謝しています。



↑ 授業の友人と



↑ 寮の友人と

オタゴ大学帰国報告書

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 4年
池田佳菜子

私はニュージーランドのダニーデンにあるオタゴ大学に7月から約4ヶ月間留学をしました。実は、ダニーデンは大学1年生の終わりに語学研修で訪れた場所でした。もう一度この場所を留学先に決めたのには、2つの理由がありました。1つ目は、以前来た時に、ニュージーランドでの暮らしをととても素敵だと思ったからです。そして2つ目は、専攻している言語学についてお茶の水女子大学では学べないことを勉強したいと思ったからです。

〈学習面〉

授業は、英語、英語教育、社会言語学の3つを取りました。授業は、先生が授業を行う講義に加え、ディスカッションやプロジェクトに取り組むチュートリアルがありました。3つの授業を通して、グループワークやペアワーク、プレゼンテーションが多くあり、とても貴重な体験でした。英語が聞き取れなかったり、伝わらなかったりともどかしい思いをすることばかりでしたが、グループのメンバーが説明しなおしてくれたり、文章を直してくれたりといつも自然にフォローしてくれました。

至らないところだらけでしたが、授業に関連することについて実践的に取り組めたことが興味深かったし、最後までやり遂げられたことが、自分にとっての大切な成果だと思っています。

〈生活面〉

私は Toroa college という寮に住んでいました。寮と言っても、シェアハウスのような寮だったため、最初はフラットメイトとうまく共同生活ができるかとても心配でした。しかし、実際に寮に着いてみるととても居心地がよく、フラットメイトも分からないことなどを教えてくれて、とても快適に過ごすことができました。昼と夜は食堂でご飯を食べることになっており、いつも何人かで固まっておしゃべりをしながらご飯を食べました。毎日いろんなことを話すことができ、とても大切な時間でした。週末には外にご飯を食べに行ったりバドミントンをしたりしてリフレッシュしていました。長めの休みがあるときは、旅行にも行ったりしました。

私は、この留学でニュージーランドの生活を楽しみ、以前より勉強にじっくり取り組むことができるようになりました。シンプルでゆったりしたニュージーランドの生活の中で1日1日を大切に過ごすことができた気がします。たった4ヶ月程でしたが、楽しかったことやうまくいかなかったこと、逆にうまくいったことなど小さな思い出がたくさん詰まった大切な留学生活になりました。



WHAT

ニュージーランド・オタゴ大学

生活科学部 人間生活学科
発達臨床心理学講座 3年
岡南愛梨

2014年7月から、2015年6月まで、ニュージーランドのオタゴ大学に留学しました。5年間アメリカに住んでいた経験があり、もう一度英語で勉強してみたいという思いと、日本以外の幼児教育について学んでみたいという思いで、留学を志望しました。ニュージーランドの幼児教育カリキュラム Te Whariki は Maori 族の文化との二文化性で世界的に有名であり、Te Whariki の作成に携わった教授のいるオタゴ大学を志望しました。

〈学習面〉

私は前期に「教育と社会」「ガイダンスとカウンセリング」「三歳以下の子ども」という授業を受講し、後期に「障害学」「幼児期に関わる機関」「子どもの発達」という授業を受講しました。すべて現地の大学生と同じ立場で受講していました。毎授業週に2時間の講義と1時間のチュートリアルがあり、毎週数本の論文を読む予習が課されていました。毎授業2-3つずつある課題がとても難しく、何週間もかけて準備をしました。結果、幼児教育を中心に、様々な角度から教育について学ぶことができ、今後日本でさらに幼児期の子どもについて学ぶ上で有益なことを多く学び得ました。また、日本ではまだ大学2

年生の途中だったため、論文を用いた勉強をしたこともなく、効果的な勉強の仕方についてもオタゴ大学で学び得ることができました。

〈生活面〉

前期は寮に住んでいましたが、後期は他の交換留学生たちと flat に住みました。同居人は、アメリカ人とドイツ人の男の子、ノルウェー人と Kiwi の女の子でした。とても居心地の良い家で、平日は夜ごはんを交代で作ってみんな一緒に食べていました。朝焼けから夕焼け、星空まですべてがすばらしく、綺麗な海や山や湖などがあり、豊かなニュージーランドの自然にたくさん癒されました。

〈今後について〉

Te Whariki についてよく学ぶうちに、さらに他の国の幼児教育カリキュラムや教育学について興味が湧くようになりました。特に私は自閉症児の幼児期における支援に興味があるため、障がい児を「特別な権利を有する子ども」とみるレジャエミリアの教育観にとっても興味があります。また、オタゴ大学の障害学の授業では、現在世界的に障がい者に対する考えがどうなっているのかを知ることができ、とても印象的でした。英語を使って学ぶことがいかに世界に扉を開いてくれるかを実感したので、今後も視野を広く持つことを忘れずに、勉学・研究に励んでいきたいと思っています。



台湾・国立政治大学

文教育学部 人文科学科
グローバル文化学環 3年
須崎情恵



私は台湾の国立政治大学に半年間留学していました。台北市内といっても端の方に位置しますが、バスや電車など交通の便は良かったため、中心部へ行くときも時間は多少かかってもあまり不便には思いませんでした。

大学の授業は、中国語のクラス（週2回×3時間）と正規の授業（国際関係、歴史の授業を2コマ）を受講していました。中国語のクラスはクラス分けテストによってクラスが細かく分かれているので、自分のレベルに合った授業を受けることができます。私の場合は、クラス分けの後、授業で学ぶ内容が少し物足りなかったため、一つ上のクラスに上げてもらえるよう先生に相談しました。クラスが決まれば同じクラスのメンバーも決まるので、授業が夕方終わってそのままご飯を食べに行ったりと、すぐに仲良くなり、毎回の授業では良い雰囲気を楽しんで学ぶことができました。その年にもよりますが、日本人留学生はあまり多くなく、私のクラスには一人もいませんでした。政治大学は韓国人留学生が多い印象を受けました。様々な国籍、バックグラウンドを持った学生がいて、良い刺激を受ける日々でした。正規の授業は、一般の学生用に開講されている授業を受講していたため、当然ながら周りは普通の台湾の学生たちです。自分の語学レベル的に難易度がかなり高く、自分でも無茶したなと思いつける日々でしたが、お茶大の指導の先生にメールで近況報告をしたところ、「日本語で授業を受けても誤解や無理解はよくあることなので、開き直ってわかるとこだけでもどんどん吸収してください」と助言をいただき、それからは良い意味で肩の力が抜けリラックスして授業を受けられた気がします。

学生寮ですが、学部生の部屋は4人部屋で、私の部屋は台湾人、韓国人、シンガポール人と、非常に多国籍な部屋でした。私たち4人の共通語は中国語だったため、中国語の勉強になる良い環境で過ごせたことを感謝して

います。寮にキッチンはなく、寮の地下にある食堂や学外の食堂で買って済ましていました。台湾では、朝食から夜食まで外食文化がかなり盛んで、安い、美味しい、ボリューム満点のものが食べられるので、今日は何を食べようかと楽しんでいた結果、順調に肥えていきました・・・。

台湾の日本語学習者の多さを肌で感じました。授業以外の時間について一言でいうと、もっぱら「言語交換」の日々でした。カフェに行っておしゃべりしながら中国語を勉強したり、空き教室で黒板を使って勉強したりと、毎回色々な方法を模索しながら楽しんで学んでいました。はじめ、2、3人くらいを目安に考えていたのですが、言語交換の相手を探していたところ、結果7人ほど相手が見つかり、言語交換を通じてたくさんの台湾の友人ができました。今でも頻繁に連絡を取り合ったりと仲良くしています。言語だけでなく、台湾の歴史や文化、社会について、政治に対する生の声などを深く聞くことのできる貴重な機会となり、かけがえない思い出になりました。また、日本語を教えていくなかで、母語である日本語の勉強になることも多々ありました。

最後になってしまいましたが、留学のテーマとして、東アジアの複雑な歴史問題（主に日本の植民地支配問題）について現地の大学で深く学びたかったため、日本の植民地統下にあったという共通点のある韓国、台湾への留学を決めたのですが、「親日国家」として有名な台湾で実際に生活することで、それがどのような意味を持つのか、今の台湾とどのように関わりあっているのか、わずかながら肌で感じ考えることができました。韓国とはまた違う、日本に対しての感じ方をもつ台湾ですが、「親日」、その一点のみを見ては決して見えてこない台湾の姿、激しく複雑な歴史の過程を経てきた台湾の姿を今回の短い留学期間のなかで知ることができました。

日本に帰国した今、「自分で考えて動くしかない状況」に鍛えられ、「挑戦が連続の日々」という良い環境だったなと懐かしく思えます。この学びをいつでもどこでも活かして行動することが留学後の新たな目標になりました。また留学先で出会った台湾の友達や留学生の友達など、様々な人々に出会い、色んな生き方にわずかながら触れることができ、当然のことですが、普通というものはないこと、生き方に正解はないことを改めて強く感じ、自分と真摯に向き合いながら、なんだか勇気付けられた時間となったように思います。留学を通して、私にとって特別な場所となった「台湾」に、今後も情熱と関心を持って関わっていきたいと思います。

WHAT

韓国・梨花女子大学

文教育学部 人文科学科
グローバル文化学環 3年
須崎情恵

私は韓国の梨花女子大学に半年間留学していました。韓国には中高生のときの滞在経験があるため、留学生活はスムーズに始められたと思います。

大学の授業は、語学のクラスはとらず、専攻の授業(史学科、国際関係の授業を7コマ)を受講していました。韓国の大学は授業にもよりますが、大体週に2回ずつ授業があり試験も中間・期末と2回にわたってあるため、ハードでしたが、その分学びも多く充実していました。留学のテーマとして、東アジアの複雑な歴史問題(主に日本の植民地支配期)について深く学びたかったため、韓国史や東アジア史の授業や、東アジアの歴史紛争、世界政治・国際関係などの授業を受けていましたが、やはりどの授業でも、今の日本に対し懸念や不安を示すような印象を受けました。領土問題、慰安婦問題、教科書問題、靖国神社問題など、いわゆる日韓の間にある歴史問題を新しい切り口で、細かく詳しく考えていくことで、日本にいながら今まで聞くことのなかったようなことについても知ることができました。日韓関係における韓国の立場や韓国の抱える内情を知り、同時に日本では見えてこなかった、韓国にいるからこそ見えてくる日本の姿を知ることで、より問題の本質がわかり、多角的に考えることの重要性を改めて感じました。これは韓国留学のあとの台湾での留学生活においても同じことがいえますが、日本を「外」からみることの重要性も知りました。外からはどのように日本や日本人を見ているのか。日本の姿がどう映っているのか。わかったような気でいながらも全然わかっていないことに気づき、実際のズレを感じるが多々ありました。

私は大学院生の寮(2人部屋)で中国人のルームメイトと生活していました。中国語を教えてもらったり、一緒に寮のジムで運動をしたり、デリバリーを頼んで夜食を食べたり・・・楽しい思い出がたくさんある一方、共同生活のため衝突することもあり軽い言い合いになることも何度ありましたが、今ではすべていい思い出です。10月からはお寿司のお店でアルバイトも始め、大学の外でも色々な人に出会うことができました。お店がソウルの富裕層の集まるエリアにあったため、芸能人や大企業の会食だったり、いわゆる富裕層の人々の姿を少しながら垣間見ることができたことも楽しい経験でした。また韓国の多くの大学生は、長期の休みには語学塾に通います。日本と比べるとかなり安い授業料で、また授業の回数も多いので、冬休みは韓国に残り中国語と英語の授業を受けたりもしました。

梨花女子大には慰安婦問題について取り組むサークルがあり、時々活動やイベントに参加していました。水曜集会といい、ソウルの日本大使館前で毎週水曜日に日本政府に対し慰安婦問題の解決を叫ぶデモが行われている

のですが、2014年12月24日の水曜集会は少し特別な日でした。小学生から中高校生、大学生と若い世代を中心に大勢が集まり、「問題解決のために若い学生が立ち上がる」という希望あふれる明るい雰囲気で行われていたことが衝撃的でした。韓国では、若者が積極的にデモなどの行動を起こしたり参加する姿が印象的です。若者が社会の現状に問題意識をもち、声をあげている姿に感動しました。もちろん若者が政治に強い関心があれば良いわけではなく、その用いる方法や主張する内容、その基となる根拠もとても重要ですが、未来を担う若い世代のまっすぐな姿勢に刺激を受けることが多々ありました。

常にアンテナをはって情報収集すること、自分で考えて積極的に動くこと、また短期の留学であるほど、計画性やタイムマネジメントがより大切になってくると思います。日本に帰国した今、留学生活で得ることのできたたくさんの学び、自分の足りない点や少しでも成長できた点などを一言にまとめることはできません。自分と向き合い悩み、ひたすら考えてみる時間を十分にもつことができ、そうして得られた発見も多くありました。そのすべてが私にとって大切な収穫となりましたし、留学期間でのかけがえない経験を今後の生活においてどのように生かしていけるかがこれからの新たな課題だと思います。私はこれからも、私にとってより大切な場所となった韓国と一生をかけて関わっていきたいと思っています。留学経験を通して、心からそう思えるようになったことに感謝し、新たな目標に向かって励んでいきたいと思っています。



梨花女子大学への長期留学を通して

文教育学部 人文科学科
グローバル文化学環 3年
田島瑞保

1. 韓国・梨花女子大学を志望した理由

中学校の修学旅行で沖縄米軍基地の一日ホームステイを経験した時から、私の心の中には「言葉も文化も違う人たちとの暮らしは楽しそう」という漠然とした気持ちがありました。その後歴史や国際問題を勉強するにつれて日本の外交政策に興味を持つようになり、私が考えてきた「日本」と他の国の人たちから見える「日本」が違うのかもしれないと思いました。他国への好奇心と「日本の外交政策（特にアメリカと極東アジア）を海外で勉強したい」という気持ちが合わさり、英語も第3言語も話したいという欲張りから、総合的に条件を判断し梨花女子大学を選びました。

2. 学校生活

多くの留学生と同じように午前中は韓国語授業、午後は専門授業という形で履修していました。韓国語については韓国語初学者として第1学期は1級から始め、第2学期はクラス分け試験を受けて4級に進みました（本当は2つ以上の飛び級は禁止らしく後で衝撃を受けました）。1級では基本的な挨拶から始めましたが4級では新聞記事を読みプレゼンするなどの内容で、ある程度実用的なレベルまで到達することができました。専門授業については全て英語のものを受講しました。主に東アジア安全保障、東アジア比較政治学、政策とジェンダーなどを履修し他にも歴史学や経済学を聴講していました。英語圏のようにチュートリアルがないため、できるだけグループワークのある授業をとるようにしました。大変でしたがかえって良い思い出になっています。最も楽しかった授業は比較政治学でした。興味のある分野であり他の学生と仲良くなり一緒に勉強したことが思い出に残っています。噂通り、梨花女子大学の英語授業の質は非常に高く韓国学生と教授陣の熱心さを感じました。授業で読んだ論文や資料は今の勉強にも役立っていますし、読み返す必要を感じさせるものばかりでした。

3. 日常生活・留学を通して学んだこと

韓国で暮らすということであるべく多面的に韓国社会について知りたいと思い行動するようにしました。地域の教会の聖歌隊での1年間の活動、脱北者との交流イベ

ント、日中韓3カ国協力事務所でのイベント運営、語学学校での長期インターンシップ、幼稚園での日本文化教室他にも様々な空間にかかわることができました。食やポップカルチャーなど観光産業はもちろん、宗教、南北問題、労働、教育様々な分野での体験を通して韓国とはどのような存在なのか考える機会がありました。印象深かったことは、韓国・中国の友人と共に UNESCO の支援を受けて East Asian Region To Hope (EARTH) という日中韓台の問題を考える活動を行ったことでした。たった4ヶ月ほどの活動でしたが、運営やイベント企画、広報まで韓国語を共通語として一から始めたため、挫折しかけたことや一晩中議論して喧嘩したこともありましたが、しかしこのことを通して最初の目的であった「日本がどのような存在であるのか」という問題を追求することができました。率直に言うと私は「日本の良さ」のみを発信し、「他国の良さ」のみ受信する媒体になるつもりは全く無く、この活動では東アジアという地域における問題と各国の欠点を全員が熱心に考え「なぜそうなのか」を国籍関係無く議論できたことが良かったです。韓国の留学経験には反省することが山のようにありますが、経験したことの中から今後も私が続けていきたいことが多く見つかりました。留学関係者の皆様にはご迷惑をおかけしましたが最後まで見守ってくださいました。感謝申し上げます。



(写真：EARTHのメンバーと)

WHAT

中国・北京大学（歴史学系）

人間文化創成科学研究科 歴史文化学コース
谷田淑子



【留学を決意した経緯】

博士課程に進学するにあたって、今後の自身の研究に役立つと考えて一年間の交換留学を決意しました。留学セミナー等への参加を通じて、自分の希望に合う留学先があること、奨学金などの経済支援が受けられること等を知り、留学への決意を固めました。北京大学歴史学系への留学を決め、留学前の半年間は後樂園の日中学院という中国語教室へ通いました。幸い、中国語は学部生の頃に3年間勉強していました。

【渡航前の準備】

語学学習のほかには、留学中の宿舎の手配、病院での健康診断（渡航後、診断書の提出が必要）がありました。

北京大学の寮について紹介します。大学には中関新園という意外に綺麗で快適な宿舎があり、日本人寮は寝室個室、リビング・浴室は二人共有で、月3000円（5～6万円）です。渡航前にグローバル教育センター経由で北京大学歴史学系の事務へ連絡し、部屋を確保してもらいました。この方が寮の手配のほかに渡航当日の空港から寮までの送迎も準備して下さり、非常に助かりました。

こういう先方への事前依頼が非常に重要だということには、あとになって気付きました。そうした根回しをせずに渡航した留学生の多くが、入寮を拒否されたりして苦労していました。

【中国での貴重な体験】

中国では、意外にあっという間に交遊関係が広がりました。日本人留学生間の交流もありましたし、日本語を学びたい中国人学生とランゲージ・パートナーにもなれ

ました。北京大合気道部に入部したことも、一年間を楽しく過ごせた秘訣です。

授業は、中国人学生にまじって学部の授業を履修しました。基本的にどの授業もパワーポイントを使用するため、先生の話が聞き取れなくても何とかできました。大学院生の授業も聴講しましたが、いずれの授業もレベルが高くとても啓発を受けるものでした。

観光や旅行も多くしました。旧正月の頃、中国人の友人の実家で親戚の方にまじって和気藹藹としたお正月を過ごしたのも良い思い出です。

中国には反日運動や PM2.5 のイメージがつきまといいますが、反日感情に遭遇することは私はありませんでした。ですが PM2.5 は存在します、マスク必須です。

【最後に】

この留学で私が得たことは、ひとつは研究や語学の点での成長です。もうひとつは、現地の文化風習を知り、現地の人を知ること、国際交流の面白さを体験できたことです。留学前は「一年だけならきつと頑張れる」という気持でしたが、留学を終えた今、私の手元には思ったよりも多くのものが残りました。中国人の友人と築いた信頼関係は忘れ難いものです。これからもそれを大切に維持していきたい、中国のことをもっと知りたいと思っています。一年で得られたものには限りがありますが、間違いなく自分にとってかけがえのない財産になりました。



帰国報告書

文教育学部
人文科学科地理学コース 3年
大内有紗

1. 大学紹介

私は上海復旦大学歴史学部へ一年間の交換留学をしました。復旦大学は中国有数の総合大学で、語学コースには毎年多くの留学生が来ています。語学コースではない本科は留学生もいるものの多くは中学・高校から中国にいる人で、交換留学生は少数でした。復旦大学は上海の北西部の五角場という場所にあり近くには上海财经大学、同济大学があります。五角場駅には大きなショッピングモールがあり、買い物も外食もそこに大抵あります。大学内の食堂はとても安く、種類も多いです。大学内にもコンビニがあり、大学から出なくても生活できます。

2. 大学生活

大学の授業は日本と同じ90分一コマです。しかし、日本とは違い45分経つと5分休憩があります。休憩中は飲み物を飲んだりトイレに行ったり、少し頭を休めたりできとてもいいと思います。授業は中国でしか受けられないものをテーマに、「共産主義市場経済論」や「薬膳と中国伝統飲食」などを取りました。授業ではグループ発表が多く、グループワークを通じて現地の学生と友人になりました。上海は南の方なので教授の言葉も普通語を話しつつ南方なまりがあり、最初は聞き取るのに苦労しました。しかし前期が終わる頃にはだいぶ慣れ、後期では高い成績をとることもできました。



四川省の九寨溝五彩池

3. その他の生活

復旦大学には日本人留学生が多く、日本人留学生会主催の交流会などもあり、そこから日本人の友人もできま

した。寮生活で韓国人とイギリス人と一緒に住んでいたのですが、彼女らともクリスマスプレゼントを交換したりおせち料理を振る舞ったり仲良くすることができました。現地の学生と共同で交流会を主催し南昌の大学へ行くこともありました。

私は中国にいる間にできるだけ多くの場所に行きたいと考え、連休のたびに出かけ、砂漠や熱帯雨林、兵馬俑や赤壁など20都市以上に行きました。友人と行くことも一人で行くこともありましたがとても貴重な体験でありました。



新疆ウイグ自治区トルファンにて
仲良くなった旅人と

編集後記

「留学」は、多方面から自分自身に挑める絶好の機会です。その挑戦は、難しければ難しいほど、その後の人生に大きく影響します。挑戦しても叶わないこともあったかもしれません。しかしそれらの経験を通して、今まで気付くことが無かった素の自分に出会い、課題を克服したり、進路を変更したり、或いは別の強みを発見し、それを伸ばしたりと、更なる成長と飛躍の機会を得ることができます。

現代社会は急ピッチで変化し、既存の価値観では判断できないことが増え続けています。今、一番求められることは、情報を獲得するアンテナを常に張り、「ぶれない軸」でそれらを正確に理解し、その都度適切な意思決定ができるように訓練することです。この「ぶれない軸」は多くの価値観や視点に触れることで構築されていきます。親元を離れ、自分と向き合い、様々な文化や人に出会える「留学」を通して、2014 年度生が各自どのような花を咲かせていくのかとても楽しみにしています。

(渡辺紀子)

発行日：2016年3月25日

発行：お茶の水女子大学グローバル教育センター

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Tel/Fax：03-5978-5913

監修：戸谷陽子（グローバル教育センター長）

編集：渡辺紀子、長塚尚子（グローバル人材育成推進センター）

印刷・製本：よしみ工産株式会社



STUDY ABROAD
ANNUAL REPORT 2014
Experiencing the World



お茶の水女子大学
Ochanomizu University